

# DMAT として被災地に派遣された看護師が活動を通して感じた課題

○遠藤 洋次, 竹村 淳子 (関西福祉大学看護学部)

## I. はじめに

災害派遣医療チーム (DMAT : Disaster Medical Assistance Team) は被災地内での医療情報収集と伝達、トリアージ、応急医療、搬送、医療機関の支援、広域搬送等を機能・役割とし、平成 17 年の発足以降、近年の様々な大規模災害で活躍している。その活動内容は、実際に被災地に派遣された多くの DMAT 隊によって報告が行われている<sup>1)2)</sup>。本研究では、DMAT 隊員として派遣された看護師が行った活動の中で感じた困難に着目し、避難所の巡回、医療ニーズの把握、傷病者対応等を通して感じた、災害救護の課題を明らかにすることを目的とする。

## II. 研究方法

1. 対象者：平成 23 年以降に日本国内で発生した災害時に、DMAT の一員として被災地で活動をしたことのある看護師とした。
2. インタビュー内容：インタビューは半構造的面接法で実施し、実際の活動内容及びその活動を通して感じた課題について質問した。
3. 分析方法：インタビューの内容を逐語録に起こし、その中から、災害救護活動を通して感じた課題について述べているところ抽出し、質的帰納的に分析した。

## III. 結果・考察

実際に DMAT として派遣された看護師 4 名にインタビューを実施した。対象者が派遣された国内の災害は、東日本大震災、熊本地震、北海道胆振東部地震、西日本豪雨であった。

活動を通して感じた課題として、〈活動内容が被災者の生活リズムに合わない〉、〈ケアの必要性をわかってもらえない〉、〈DMAT 本部からの指令が届かない〉、〈活動場所や内容が他団体と重複する〉、〈情報システムの混乱から医療ニーズの把握が困難〉が分類された。

DMAT は災害急性期に支援を行うための高度スキルを身につけているが、その能力を発揮するためには、活動内容を被災者の生活リズムに合わせて行く必要性が考えられる。また、技術の提供だけでなく、予防策に関する知識提供の必要性なども示唆された。DMAT 本部や他団体との連携は、うまくいっていないと、被災者へ不要なストレスを与えることも考えられる。そのため、平常時より、他団体も含めた連携体制について確立して行く必要性が考えられる。

## IV. 結論

DMAT の活動内容が被災者の生活リズムと合わないことや、行なったケアの必要性を被災者にわかってもらえないこと、DMAT 内や他団体との連携の難しさなどの課題が明らかとなった。今後は、DMAT の活動内容や時間、場所を被災者の生活に合わせて調整すること及び、被災地で活動する様々な医療支援団体との連携体制を平常時から確立することが、DMAT のもつ力の発揮につながると考える。

## V. 文献

- 1) 中村聡子 (2017) : 2016 年熊本地方地震における災害医療支援活動報告, 京都市立病院紀要, 37 (2), 144-147.
- 2) 中村忍, 宇津秀晃, 山下典雄, 他 (2017) : 熊本震災における DMAT 1 次隊の活動報告, 久留米医学会雑誌, 80 (1), 16-22.